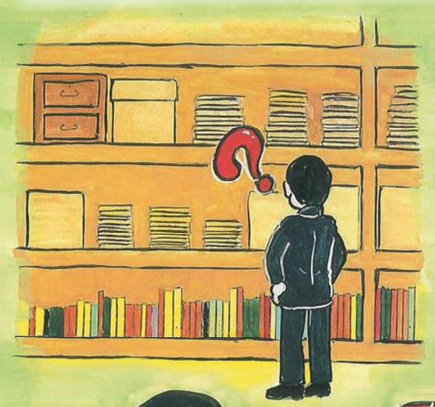
留学を終え、日本に戻った諸橋博士は、援助をしてくれた岩崎小彌太社長にあいさつに行きました。

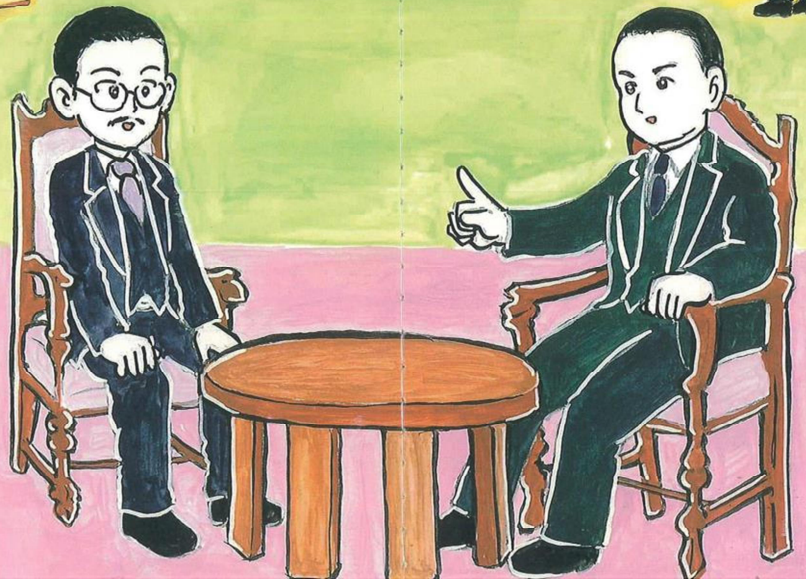
岩崎社長は、良い本をたくさん見つけてくれたと喜び、静嘉堂文庫の文庫長になってほしいと諸橋博士に頼みました。

「どんなに良い本がたくさんあっても、きちんと目録があって、利用しやすくなっていなければ役に立ちません。中国の文化に詳しい諸橋さんに、目録作りをお願いしたい。」



岩崎社長の話を聞きながら、諸橋博士はなるほどと思いました。漢学の勉強をしている時も、きちんと整理された辞典があれば、勉強の効率があがるのに、と考えていたからです。

※大正十二年、関東大震災が起こり、静嘉堂の蔵書は災害に備えて東京郊外に移転しました。



諸橋博士は静嘉堂文庫の文庫長として資料の整理をしながら、東京高等師範学校で漢文を教えていました。

静嘉堂文庫は、岩崎社長の父である岩崎弥之助が創設したもので、東洋の文化が失われないよう、貴重な文化財を集める目的がありました。岩崎社長も毎週のように静嘉堂文庫を訪れて、諸橋博士から中国の古典を学んでいました。

忙しく研究を続ける諸橋博士を、鈴木一平という人が尋ねてきました。

鈴木一平は大修館という出版社の社長で、諸橋博士に漢和辞典を作ってほしいと頼みました。辞典の編さんは諸橋博士も考えていたことではありましたが、簡単にはできるものではありません。諸橋博士が辞典の編さんを決心したのは二年後でした。

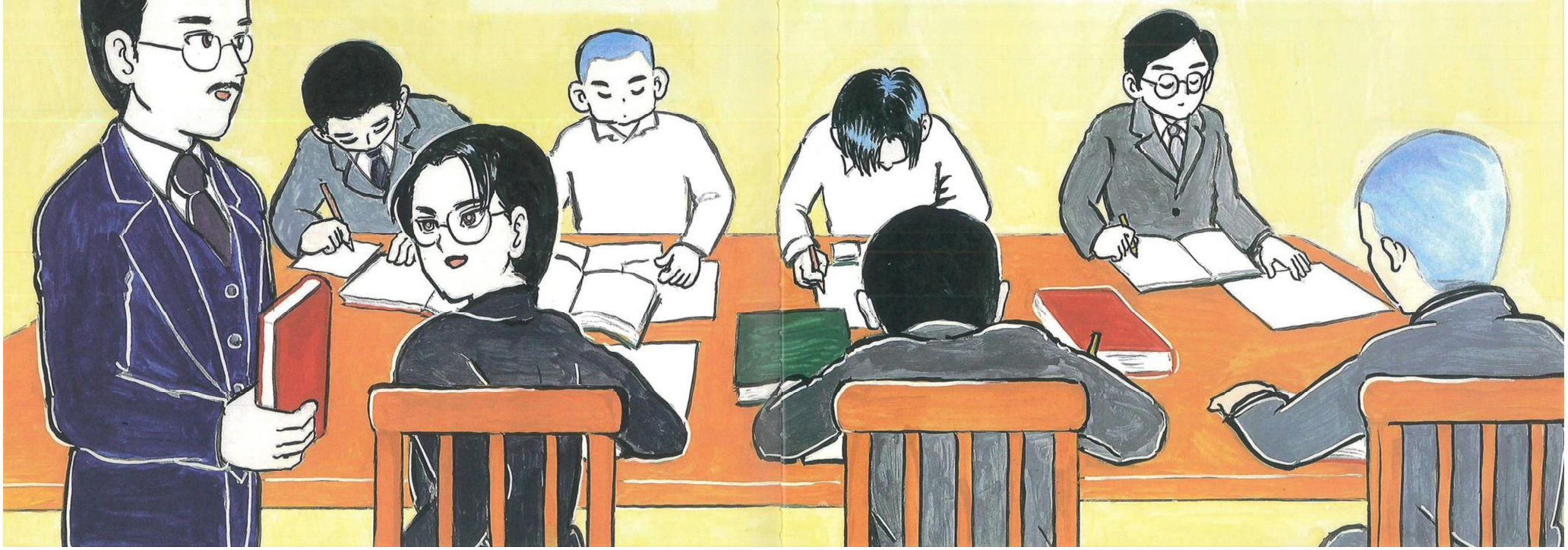
昭和四年（一九二九年）、いよいよ大漢和辞典の編さんが始まりました。中国や日本の古典から現代までのたくさんの資料の中から漢字と熟語を集め、わかりやすく整理していきます。諸橋博士の教え子たちが、この大変な作業を手伝ってくれました。

諸橋博士は、大漢和辞典の編さんをする場所を「遠人村舎」と名付けました。

作業が始まってから二年目、諸橋博士は、集めたたくさんの漢字が一冊でおさまらず、何冊になるかわからないと鈴木社長に伝えました。鈴木社長は驚きましたが、良い本を作るために最後まで取り組もうと決心をしました。

昭和十二年（一九三七年）、全ての原稿の版が組み上がり、印刷するのを待つだけとなりました。

※「遠人村舎」には、人を遠ざけて研究に専念するという意味が込められています。



当時、日本は戦争中で、国から許可を受けなければ出版することができませんでした。鈴木社長が国と何度も交渉を重ねた結果、ようやく一万部発行の印刷が許されました。

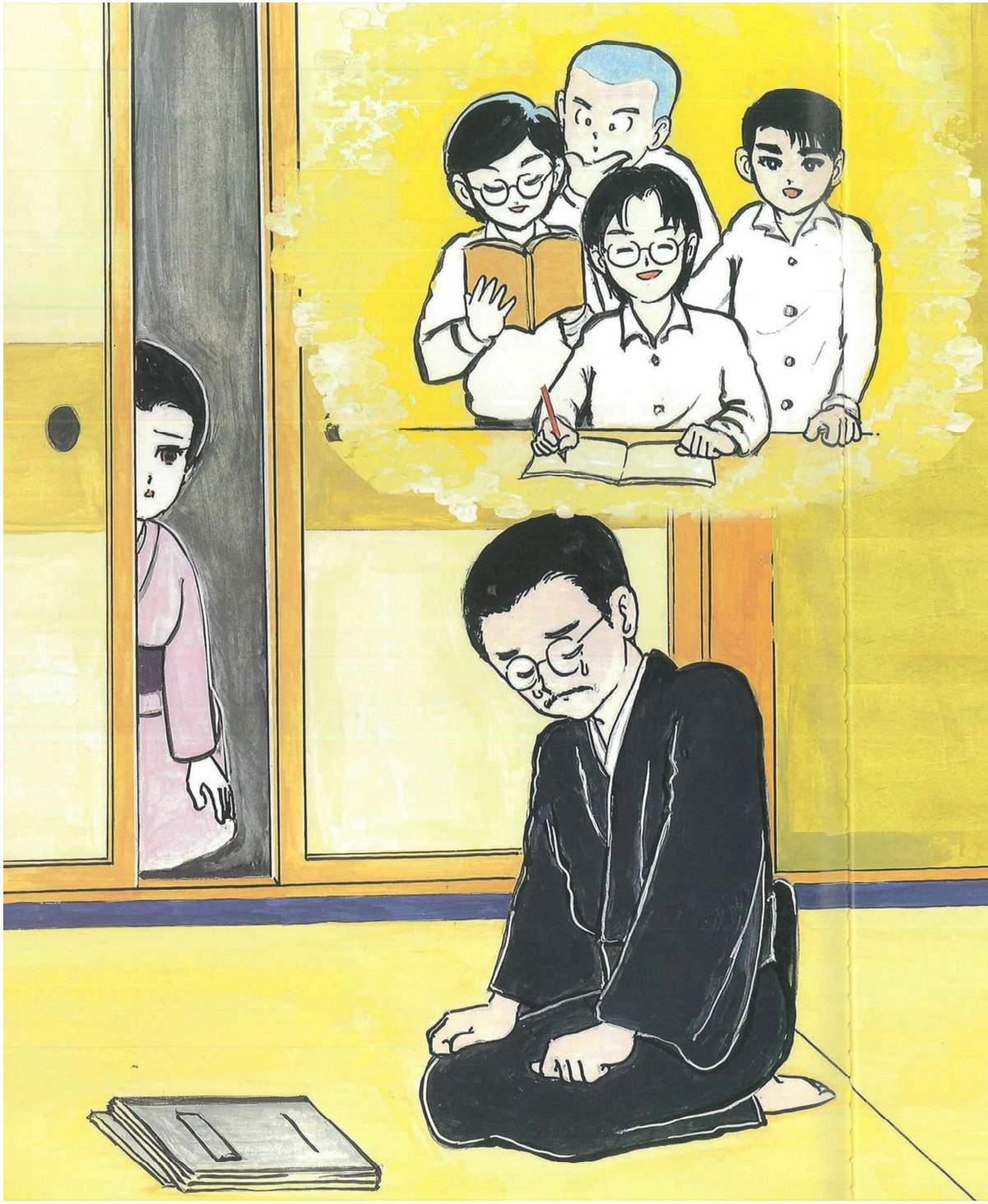
予約募集をしたところ、予定を上回る予約が集まりました。

昭和十八年（一九四三年）九月十日、『大漢和辞典』の巻一が出版されました。鈴木社長と出版の約束をしてから、十六年がたっていました。

誰もが全巻の印刷を待っていましたが、原版はできたものの、紙を用意することができず、印刷ができずにいました。

昭和二十年（一九四五年）二月一五日、東京に大空襲があり、大修館は焼け、印刷されない原版も全て燃えてしまいました。

※昭和十九年、諸橋博士は『大漢和辞典』が認められ、「朝日文化賞」を受賞しました。



原版がすべて焼けてしまったと聞いた諸橋博士は、戦争中なので仕方がないとあきらめました。

この年の夏に戦争は終わり、日本は戦争のダメージから食料や物が不足していました。

このころ、漢和辞典の作業を手伝ってくれていた教え子たちが、相次いで亡くなりました。

二十年近く、こつこつと原稿を書き、印刷を待つだけだったものが一瞬にして消えてしまい、作業を手伝ってくれた教え子が亡くなり、諸橋博士はとても悲しくなりました。

さらに、長年細かい字を見続けたことで、右目は失明、左目もかなり見えない状態です。

「もう、漢和辞典はできないだろう。」

諸橋博士は、辞典の完成を信じながら亡くなった教え子たちに申し訳ない思いでいっぱいでした。

諸橋博士は、災害に備えて移転した静嘉堂文庫に習って、辞典の校正原稿（仮の原稿）を自宅や静嘉堂文庫に保存していました。

「大漢和辞典」は印刷をしないまま、原版を失っています。しかし、校正原稿が残っていることを知って、鈴木社長はとても喜びました。

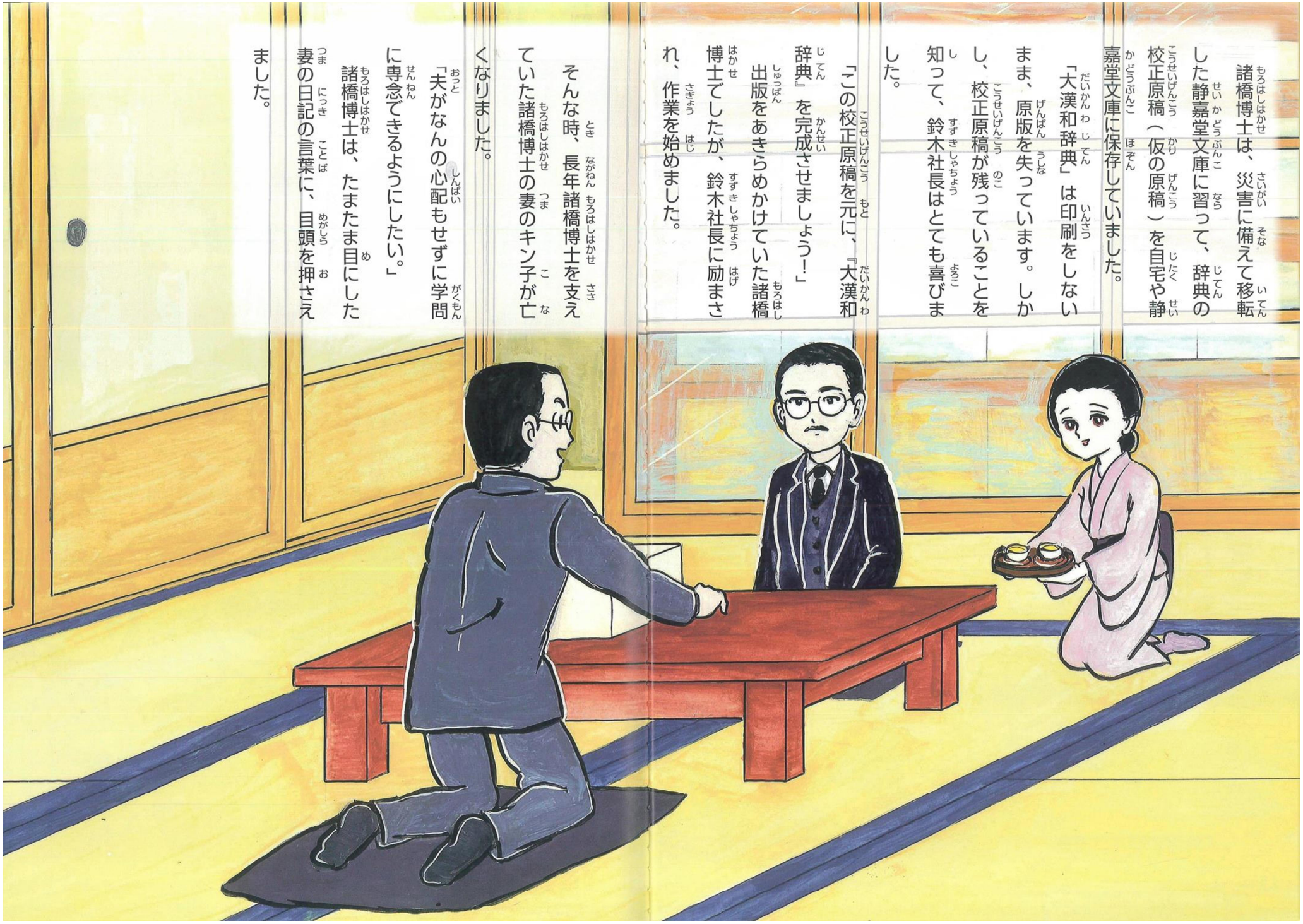
「この校正原稿を元に、『大漢和辞典』を完成させましょう！」

出版をあきらめかけていた諸橋博士でしたが、鈴木社長に励まされ、作業を始めました。

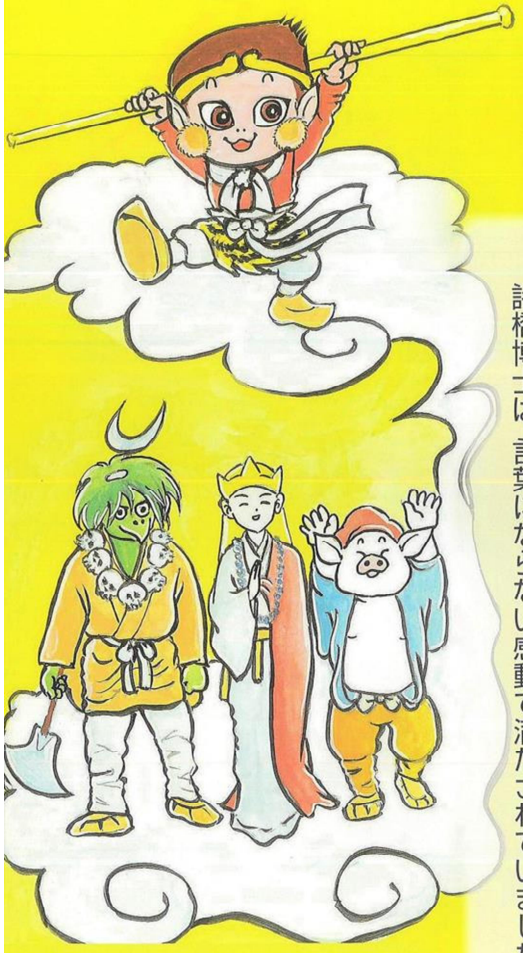
そんな時、長年諸橋博士を支えていた諸橋博士の妻のキン子が亡くなりました。

「夫がなんの心配もせずに学問に専念できるようにしたい。」

諸橋博士は、たまたま目にした妻の日記の言葉に、目頭を押さえました。



昭和三十年（一九五五年）十一月三日文化の日、「大漢和辞典」巻一が刊行されました。そして、昭和三十五年（一九六〇年）五月二十五日に全十三巻の刊行を完了しました。鈴木社長が諸橋博士に辞典作りをお願いしてから、三十五年の月日が流れていました。



十三巻目の出版の日、文部大臣や駐日中国大使を招いて「大漢和辞典」の全巻出版記念会が開かれました。諸橋博士は、父や母、奥畑先生の教えから漢語に興味を持ったこと、中国の学者と親交を暖めたこと、遠人村舎で教え子たちと原稿を書いていたこと、支援してくれた嘉納先生や岩崎社長のことを思い出していました。

「多くの人の思いがこもった辞典なのだ。」

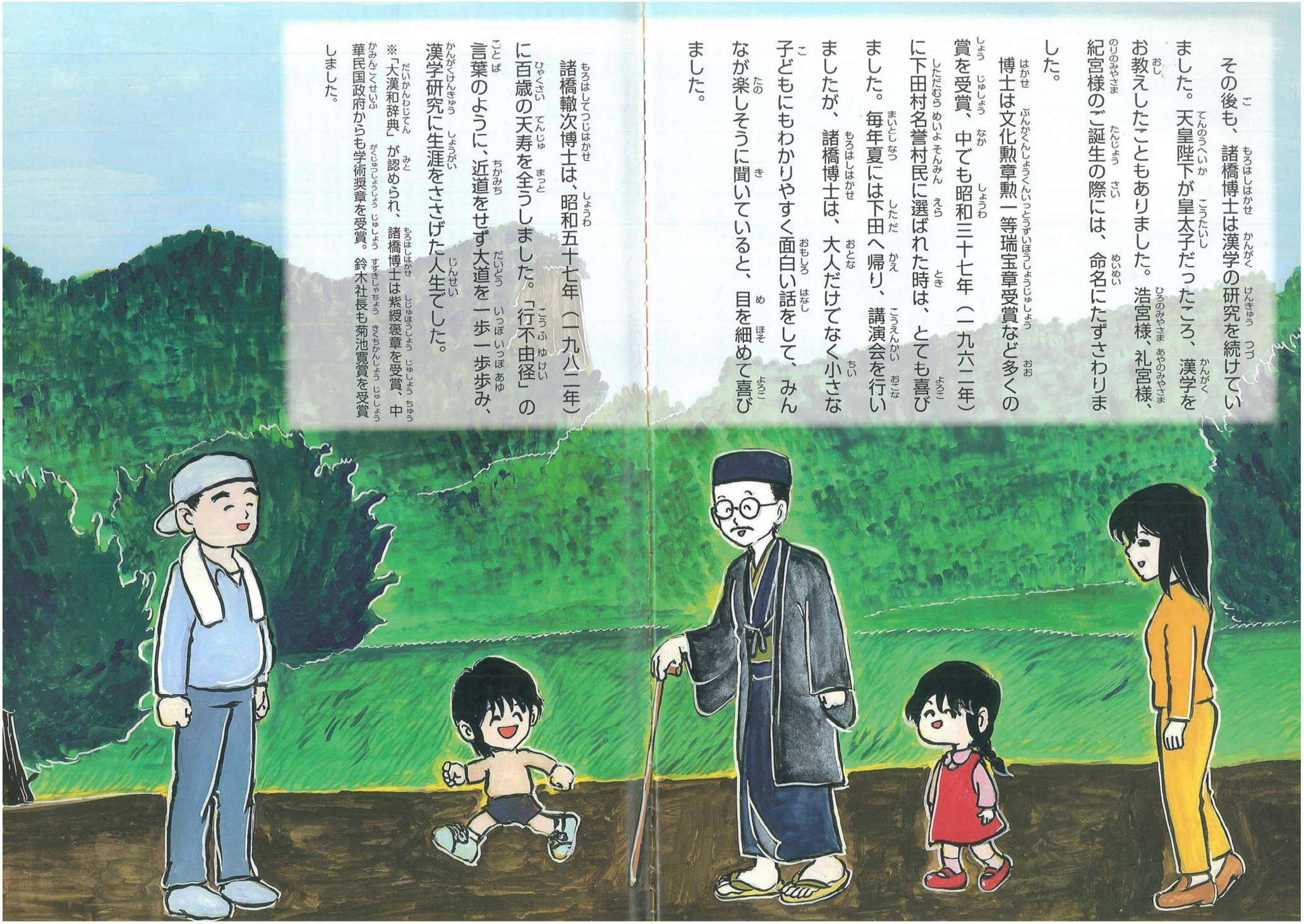
諸橋博士は、言葉にならない感動で満たされていました。

その後も、諸橋博士は漢学の研究を続けていました。天皇陛下が皇太子だったころ、漢学をお教えしたこともありました。浩宮様、礼宮様、紀宮様のご誕生の際には、命名にたずさわりました。

博士は文化勲章勲一等瑞宝章受賞など多くの賞を受賞、中でも昭和三十七年（一九六二年）に下田村名誉村民に選ばれた時は、とても喜びました。毎年夏には下田へ帰り、講演会を行いましたが、諸橋博士は、大人だけでなく小さな子どもにもわかりやすく面白い話をして、みんなが楽しそうに聞いていると、目を細めて喜びました。

諸橋轍次博士は、昭和五十七年（一九八二年）に百歳の天寿を全うしました。「行不由径」の言葉のように、近道をせず大道を一歩一歩歩み、漢学研究に生涯をささげた人生でした。

※「大漢和辞典」が認められ、諸橋博士は紫綬褒章を受賞、中華民国政府からも学術奨章を受賞。鈴木社長も菊池寛賞を受賞しました。



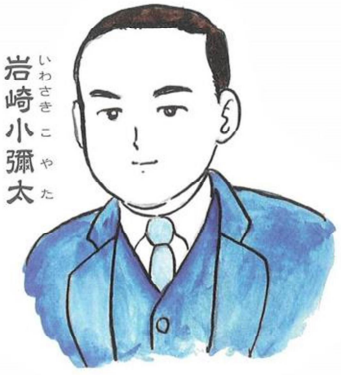
人物紹介

奥畑米峰（儀平）

諸橋轍次の父の朋友で諸橋轍次の学塾「静修義塾」の先生。村松藩士で、明治になってからは刀を捨てた武士の生き方を模索、下田で茶畑を作ったり、馬の牧場を作ろうとしました。自由民権運動にも力を入れ、加波山事件の犯人をかくまったため、一年間入牢し、茶園も産馬会社も解散となりました。産業で地域を活性化させようという夢が破れ、「教育」にたどりつきました。下田で、七年間に百六十六名の門弟を教育しました。

嘉納治五郎

柔術を集大成した、講道館柔道の創始者です。教育者としても優秀で、諸橋轍次は東京師範学校で指導を受け、嘉納の計らいで中国留学もかないました。嘉納はグローバルな考えを持ち、ラフカディオハーンを教師として日本に招いており、およそ八千人の中国留学生に教育を施し、中国教育の基礎を作る教育者として巣立たせたともいわれています。東洋最初のIOC（国際オリンピック委員会）委員となり、カイロ総会で、冬季大会の札幌招致に成功したものの、帰途の船中で死去（肺炎）、誘致は幻のものとなりました。武道も教育の一環であり、嘉納は「人を育てる」教育者だったといえます。



岩崎小彌太

三菱の創始者、岩崎彌太郎の弟の子どもで、三菱の四代目の総裁です。一九〇㎝一〇〇kgという巨漢でした。ケンブリッジ大学を卒業、三菱を財閥に育てる傍ら、山田耕筰を留学させ、東京フィルハーモニーの育成にも力を入れました。アジアの文化を保存する意味で静嘉堂文庫をつくりました。財閥が私欲のために戦争をおこしたというGHQの言葉に憤慨し、終戦時、GHQの圧力による財閥解体に最後まで抵抗しました。国際的な思考力を持ち、芸術文化にも造詣が深く、経営能力にも長けていた岩崎小彌太でしたが、三菱財閥は解体され、失意のうちに亡くなっています。

諸橋轍次博士　年譜

明治16年（1883）6月4日
新潟県南蒲原郡四ツ沢村（後の下田村、現在の三条市）に生まれる。

明治20年（1887）5歳
「三字経」の素読を学ぶ。

明治29年（1896）14歳
奥畑米峯の静修義塾に入り、3年間もっぱら漢学を修業

明治37年（1904）22歳
新潟師範学校卒業

明治41年（1896）26歳
東京高等師範学校国語漢文科卒業

明治43年（1910）28歳
東京高等師範学校研究科卒業、同校助教諭となる。

大正8～10年（1919～21）37～39歳
2年間、中国に留学

大正10年（1921）39歳
三菱岩崎小彌太社長より静嘉堂文庫長を委嘱される。

大正14年（1925）43歳
大修館書店の鈴木一平社長が訪れ、巨大な漢和辞典の構想を持ちかけられる。

大正15年（1926）44歳
大東文化学院教授となる。

昭和3年（1928）46歳
大修館書店との間に大漢和辞典編纂の約定成る。

昭和5年（1930）48歳
東京文理科大学教授となる。

昭和7～18年（1932～43）50～61歳
東京文理科大学附属図書館長、国学院大学教授、東京帝国大学講師、国語審議会臨時委員などを歴任

昭和18年（1943）61歳
「大漢和辞典」第1巻が刊行、朝日文化賞を受ける。

昭和20年（1945）63歳
東京大空襲により「大漢和辞典」の全巻の組版と資料を焼失
東宮職御用掛を拝命 皇太子殿下に漢学を進講
東京高等師範学校教授兼東京文理科大学教授を辞任

昭和21年（1946）64歳
東京文理科大学名誉教授となる。

昭和30年（1955）73歳
再び「大漢和辞典」第1巻刊行

昭和35年（1960）78歳
紫綬褒章を受ける。
都留文科大学学長となる。「大漢和辞典」全13巻完結
皇孫、浩宮徳仁親王御降誕に際し、御名号・御称号を勘申する。

昭和40年（1965）83歳
文化勲章を授けられる。皇孫、礼宮文仁親王御降誕に際し、御名号・御称号を勘申する。

昭和51年（1976）94歳
勲一等瑞宝章を授けられる。

昭和57年（1982）100歳
大漢和の縮小版である「広漢和辞典」全4巻（共著）刊行
12月8日、老衰のため永眠

昭和58年（1983）3月31日
郷里下田村において名誉村民葬が挙行される。

平成12年（2000）
「大漢和辞典」修訂版・語彙索引・補巻　全15巻完結

おわりに

何かを表現する時に、漢字は欠かせないものです。その漢字を研究するために諸橋轍次博士は『大漢和辞典』を作りました。今のようにパソコンに打ち込んで一瞬にして分類、ということができない時代に、調査、研究、分類、原稿へ…という作業は気が遠くなるものだったと思います。完成した原稿が全て焼失してしまったり、弟子や妻との別れ、失明など、多くの苦難を乗り越えて出来上がった『大漢和辞典』。諸橋博士の漢字文化への愛情と熱意が感じられます。

この偉業をなしとげた人物が、三条市庭月出身の諸橋博士であったことは、私たちの誇りです。諸橋博士は毎年夏、ふるさとに滞在しては墓参りをしていたといいます。感謝の念を忘れずに、いつも謙虚な気持ちでいた諸橋博士の「行不由径」の言葉を、これからも語り継いでいきたいものです。

高橋郁丸

（参考文献）

『ことばの海へ雲にのって　大漢和辞典をつくった諸橋轍次と鈴木一平』岡本文良、高田勲（PHP研究所）

『岩崎小彌太　三菱を育てた経営理念』宮川隆泰（中央公論社）

『郷土再発見！ふるさとの誇り一〇〇話』多高橋郁丸（考古堂書店）

『嘉納治五郎先生の功績（筑波大学ホームページ）』

諸橋轍次博士ものがたり

平成二十三年三月四日発行

絵・文　高橋郁丸

発行　三条市

〒九五五－八六八六

三条市旭町二丁目三番一号

電話（〇二五六）三四－五五一一

ＦＡＸ（〇二五六）三四－五六九一

印刷　西巻印刷株式会社